通信書類可

いらつめ第四十五號目次（明治廿三年三月九日）

●若の花…まなべ、あろべ、れふれ（韻文）

嶺の勇氣

冬の朝の羽織り

出來る

春の花鳥（韻文）

契の皮

若者ふたり（繪入り）

●雜　纂…女學生の晩聞‖日本陶器小史‖漢字異

辭同義‖花顏玉手秘事‖其他

●廣　告…

廣告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵税共金三錢、十二部金二十九錢郵税共金三十五錢、二十四部金五十七錢郵税共金六十九錢、三十六部金八十四錢郵税共金一圓〇二錢、四十八部金一圓郵税共金一圓二十四錢●別製一部金三錢五厘郵税共金四錢、二十部金六十五錢郵税共七十五錢、五十部金一圓六十五錢郵税共金一圓九十錢●並別兩製共前金領收の上で無くては差上げぬ事●府内に限り無郵税●毎月四回（九日十日二十四日廿五日）發兌●金子御差し送りの手續きは郵便小爲替なれば拂渡郵便局さある處に（神田郵便局）さ記し、受取人欄内に（神田平永町九番地成美社）さ御記入の事●郵劵代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割り增しなれば妨げ無い事●見本は五厘切手で並製五錢別製七錢領收の上差し上げます●廣告料一行金八錢、割引無し

從第三十八號至第四十七號十部版權所有

明治二十三年三月八日印刷

明治二十三年三月九日出版

發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎

印刷人　同市同區同町同番地成美社方寄留　佐野忠吉

發行所　東京市神田區平永町九番地　成美社

前號には色石版野外少女●の圖●裁縫料理縫取處女の愛情

唱俳歌文美妙子の其儔などが出て居ます

莟の花

一名　小學校

趣意　俗諺を主にして力めて野鄙を去り、そして修身を目的とする事。

第一　まなべ、あそべ、ねふれ（韻文）

一　まなべ

こどもよ　まなべ、おもちやを　しまへ、
あそび　たい　なら　まづ　よく　まなべ。

二　あそべ

こどもよ　あそべ、わすれよ　うさを、
なまけず　あそべ、きまゝふ　あそべ。

三　ねふれ

こどもよ　ねふれ、ねむりて　やすめ、
からすも　ねぐら、金魚も　しづむ。

第二　蟻の勇氣

子供衆の中には定めて蟻の塔といふものを見た人も有りましやう。蟻の塔といふは數萬疋の蟻が寄ッて土でこしらへた塔で、こしらへ上げたのは中々しつかり出來て居ます。蟻は生れつき勉強家ではたらくのを好み、働く時には精を出します。そして志ざしが甚だしつかりして居ます。

あるところで蟻が米粒を自分の巣へ持ッて行かうと骨を折ッて居ました。が、その道に一寸した木の片が落ちてありましたが、蟻が巣に歸るにはどうしてもこの木を乗り越えなければなりません。人間から見れば木の片など何でもありませんが蟻には之が山のやうに思はれました。しかし蟻は弱りません。一生懸命米を引き上げやうとしましたが、三度が三度とも力が足らずお米もろとも落ちました。さすがの蟻も之には力が盡きた樣子、しばらくは動かずに休んで居ました。やがて疲れも休まッたと見えて又々貴い米粒を引き上げやうとしました。が、また米粒と一途にころげ落ちました。あゝ蟻はどうしても米粒を取り上げずにしまふことでしやうか？　と思ふところへ幸に友だちの蟻が來ました。前の蟻が困ッて居るのを見て是も今度は一途になッて

奮ひ起ッて二疋で引き上げまーした。 今はもう二人の力です。終に米粒は美事に上へ引き上げられました。

それからは道も平なる譯ハなく蟻も米粒を巣に持ッて行ッた事でしやう。それも何故と言へば蟻が氣を落とさずによく骨を折ッたからです。

第三　冬の朝の羽織り

花子といふある學校の女生徒が朝學校へ出掛けまーした。この日ハ二月のはじめで寒さは骨にとほるばかり、地面の枯れ草にハ霜が雪のやうにかぶッて居ました。やがて學校まで近くあッたところで料らず一人の朋友にあひました。

この朋友は露子と言ッて大變に意地がわるくいつでも花子をいぢめて居ました。 花子ハ金持ちの子、露子は貧乏人の子、今日花子は着物を澤山着て居ましたが、露子は薄い着物を一枚しか着て居ません。 寒さうにふるへて居るその姿を見て花子は可愛さうに爲りました。——

「あゝ露子さん、こゝへいらッしやい、わたしの羽織を一途に着て行きましやう。」

羽織をひろげて半分づゝ身にまといました。 なかく丁度二人とも巣の中に居る鳥のやうで大變にあたゝくなりました。 そして學校へ着きました。

その時から後露子は花子をすこしもいぢめなく爲ッて、二人は實に中のいゝ友だちとなりました。 それも何故と言へば花子が怨みを忘れてやさしくしてやッたからです。

第四　出來る

出來ぬといふ者に物の出來る事は無く、やッて見やうといふ者にいくらか爲とげぬものは無く、どうしてもやらうといふ者に何でも出來ぬものは無い。

第五　春の花鳥

つぼすみれ、やへざくら、
　ながき　ねふりを　いで　さませ　！
この　よを　かざる　かみの　慈悲
　慈悲の　にほひを　かゞやかせ！

つばくらめ、にほひどり、
　みどりの　野邊に　まひ＝いでよ！
この　よに　ひゞく　神の　うた
　うたの　こゝろを　つたへ　かし！

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

第六　梨の皮

この四五日めづらしく風も吹かず、夜が明ければ蒸すやうな春のあたゝかさ、花は一時に咲き出して花見に行く人はいづれも綺羅をかざり、或ハ馬車人力車にのり、あるひはぶら／＼歩きながら楽しさうに思ひ／＼の處を指して行きました。華族の御姫さまで春さまといふことし五つの可愛らしい子は乳母を相手に奥庭の芝の上で遊んで居ました。

單ざくらの早いのは既に散ッて泉水にこぼれ散り、芝生のところ／＼にある芽出し紅葉はうつくしい紅い芽を可愛らしく出して居ました。空はよく晴れて着物一枚でも凌げるかと思ふ程あたゝか、その暖さにつり出されてか、木の蔭では小鳥が面白さうに鳴いて居ました。

乳母は阿姫さまおむかひ。

「鳥がよく泣いて居りますこと、鳥が御はなしをいたして居りますの。」

「鳥が御はなししてるの？」阿姫さまが、「ばアやア御前も御はなし御為よ。」

「御はなしで厶いますか？　乳母もう御はなしハ存じませんの。」

「昨夜はなしたぢや無いの？」

「あれだけで厶いますの。あれ御はなしいたしましやうか？」

「うゝん、あれいや。外のを、よウ。」

「外のは存じませんの。」

「うゝん／＼。」

「だッて存じませんもの。」

「あれでもいゝよ。」

あどけない御姫さまの言葉に乳母もはなしを始めましたがふざけてすこし違へてはなすと御姫さまはよく知ッて居ることゆゑ、嘘だ／＼と口を入れました。

「ばアやア、昨夜のとちがふよ、あたし否。」

思ひ出したことが有ッて、

「梨たくれ。」

庭へあそびに出る前奥さまが下さッた貯ひの梨子を乳母が持ッて居たそれを御姫さまは思ひ出したのです。

乳母は梨を快から出して、小刀を持ッて皮を剝きはじめると、御姫さまは面白さうに目をまろくして見て居ました。

「さアむけました。めしあがれ。」
言ッて梨を出して不圖乳母ハ思ひつく事が有りました。
「御姫さま、面白いおはなしいたしましやうか？　こゝ
お只今むきました梨の皮がムいましやう、こら、こんなに長
くつながッて。　あら、引ッ張ッて御切りあそばしてはいけ
ませんよ。　御覧あそばせ、斯う下へ置きますと、字々のや
うでございましやう。」
「あ、おもしろいのねエ。やア字々が出た。」　乳母の顔
を見てにつこり笑ひ、「この字々あたし知ッてるの。」
「御利口なこと、御存じで入らッしやいますの？」
「あゝ、これは、ね、あたしの、はアさまの『は』だよ。
それから、ね、こゝハ御あねエさまのたアさまの『た』よ。」
「よく、ま、御存じ。御利口でゐらッしやいますこと。」
乳母も笑坪に入り、御姫さまもなみ〳〵のはなしより面白
くなッていろ〳〵に皮を字おこしらへて遊んで飽きずに春の
日をおくりました。

第七　若者ふたり

こゝに居る若もの二人は業を終ッてから休んで居るのか、
それとも業をせずに休んで居るのか、どちらでしやう？
業を終ッてから休んで居るならば如何にもたのもしいものゝ
もしさうで無かッたものなら最もいやしむべきもの、人間の
屑。その類のものに限り、酒などの悪事に染まッて終に永久
浮かむ瀬が無くなるのです。

數學

トランプ遊戯法の數理

緑梅子

いらつめは此號から數學上の事を載せるので、何か御覧に面白い事でもと思ひました。が、別にこれと言って面白い事か思ひつきません。で、題の様な事を書くこととなりました。

さてトランプの遊戯法と言っても隨分少なくもありません。が、先づ私が數理を説明するのは次の通です。——

諸孃も御存じの通りトランプには一二三……九十兵后王の十三枚が四種類あって、都合五十二枚です。此五十二枚の中の奇數——一三五七九十一（兵卒ノ了）十三（王ノ了）——の中で隨意の札をふせて、其上に其次の奇數から十三まで數へて載せるのです。其載せる札は何でも差支ありません。斯して幾つでも御勝手な程お作んなさい。ソーして餘札（あまりふだ）の數と群の數を云って、もとふせた札にある數の總計を當てる法です。」

此の當て方は覺えて居て鳥渡慰になります。けれど、諸孃も恐らく始めてゞせう。それに馴れない書方ですから御譯り悪ひ事は知って居ます。が、務めて委敷言ふ積りですから御目まだるい事でせうがゆるゆる御覽を願ひます。

先づ一九三五七五三一の八枚の札をふせたとして、それぞれ其上に其次の數奇から十三までの奇數の數だけ載せて九枚の札が餘ります。この餘札九枚と群の數八を云へば、もとふせた八枚の札にある數の總計三十四を當てる法です。

此當て方は十六——群の數が八ッの時に限りませう——に餘札の數九の二倍十八を加へて、三十四と答へるのです。

また一三五三一三七一の八枚をふせて、前と同じ様にしたなら餘札の數は四枚となります。で、前の當て方と同じ事で、十六に四の二倍八を加へて二十四といふ答を得ます。

前の二つの例にある十六を便義の爲め法と言います。この法は群の數の増減に依って互ひに違ふもので、群の數が九なれば法は三十一。群の數が十あれば法は四十六。十一なれば六十一、十二なれば七十六です。十三以上も同じ理で群の數が一つ増せば法は十五を増します。

で、群の數が八以下の時も法ハ換ります。が、前の場合の様に一定した規則はありません。たゞ一ッ一ッ覺えるより外に仕方はないです。群が二つなら法は二。群が三つなら法ハ三。四つなら四、五つなら七、六つなら十、七つなら十三となります。此他にまだ常減數と云ふものを覺えて居

なければなりません。　常減數もやはり不同で、群が二つなら常限數は四十八、群の數が三つなら常限數は三十一、四つなら二十四、五つなら十八、六つなら十二、七つなら六です。

　さてこの常減數とは何んなものか？　夫れを知らなければ此の當て方も出來ない道理、ですから例を擧げて言いませう。　今一三五七の四枚札のをふせたとして餘(あまり)を檢(あらた)めれば三十枚です。　此三十から常減數二十四を引去つて餘りは六となります。　この六と二倍して法四に加へ、十六を得て答とするのです。

　當て方ハ大体右の通りです。　これからは當て方の數理を說きませう

　毎月一回懸賞して生徒に和歌を作らしむ甲賞は二十四錢の品乙賞は十八錢の品とす今一生あり一年間に得たる高一圓九十二錢だけの者なりといふ若し此割を以てせば三年間には此人甲賞を得る事幾度なるか　答六度

解、　$192\div12=16$……一ヶ年間に得たる高の平均數

是を以て實限混合法を施せば

16	24	2		2
	18		8	8
	0	1	1	2

$2+8+2=12,\ 2\times\frac{12}{12}=2$

$2\times\frac{8}{1}=6$……求むる度數

算　術

(1)一素數と其數字を顚倒して作つたる他の一數と（例へば37と73）は公約數を有せざることを證……岡田榮吉

(2)同時に於て甲室の温度ハ華氏八十度乙室の温度は列氏二十一度なり甲室の乙室より暖たかなる度數を攝氏にて示めせ

(3)淸國北京は東經百十六度にあり荷蘭國アムステルダムは東經四度四十五分に在り由て問ふアムステルダムの午前九時三十五分二十四秒は北京の何時に當るや

　但し英國グリーンウヰツチを經度の元界とす

(4)三位の數あり4にて除すれば4を剩し11にて除すれば5を剩す而して此數の單位と十位の數字ハ相等しといふ本數幾何なりや

代　數

(1)甲乙二船あり共に同港を發し甲は正東へa里航し乙は西北へp里航せり今兩船の相距る里程を顯はす代數式を作くれ

(2)
$$\begin{cases} x+y+z=60 \\ u+y+z=55 \\ u+x+z=50 \\ u+x+y=45 \end{cases}$$
を解いてu z y xノ法を求む

右　岡田榮吉

雜纂

女學生の醜聲

一犬實に吠えて萬犬實を傳へる事ハ多く罕で、一犬が虚ふ吠えて萬犬が實を傳へることが却ッて多いです。先頃の讀賣新聞に出た女學生の醜聞について女學雜誌ハいつもの熱心を以てしたゝかに反對しました。われ〳〵も日頃婦人雜誌に筆をとるかはりに女學生の事ふついて聞き込むところも他の局外者よりは早くまた多い事で、如何さま今日のやうな醜聞も多少耳にしました。が、更に讀賣記者の傳へる處ほどとは思ひませんでした。あゝそも〳〵吾々の不敏、臭いものを見落としたことか、讀賣記者の極めて捷敏、つひに斯う事實をたしかに顯はすまでに爲ッたのか、いづれとも自家では判斷も付きませんが、兎に角之を虚說とすれば世に女子を輕んずる風習がこれ程までまだ殘ッて居ると思ひ、また清淨な女子生徒君の迷惑とも想ッて長大息しなければならず、また之を實說とすれば猶の事、そのやうな不德な女生徒が多く有るのを悲しまなければ爲りません。

諸處で傳へたところの醜聞につき、其醜聞の箇條ハどのやうな事と子細にしらべたら旣に女子に目を注ぐものも其風說の虚か實かは分かる事で、よし實にしろ、其說は一般の女學生の上では無いと知れましやう。今日世に傳へる女學者の醜聞といふものいづれも取りとまらぬ事のみです。わづかに春畫をたくはへたとか、途中で情夫を見送ッたとかの事を言ひ立てゝ冷笑すれば世間何物かゝりの冷笑を受けぬものがありましやう。もとより春畫をたくはへるのも褒めたことでは無い。しかしよし誰かそのやうな陰事を行ッたふしろ、發表して公然とそれを世に觸れ、人ふ誇るものが有りましやうか。たゞ貯へただけを以て事々しく言ひ立てるのは針を棒にするといふもの。人間の劣情ハ猶情慾の基礎とも爲ッて居る、その劣情を人の知らぬ陰に於て一時思ッたものが假に有るとして猶そのものを咎められましやうか？　或は女學生がそのやうな事に心を傾けたか知れぬ、それハ無論よく無いこと。が、鳴らして世の中に傳へるとハまた酷でそ。　矯正の手段は訐くにあらず、服せしむるにありと古人も言ひました。

多數の女生徒中には人の傳へるやうゐ不德を行ッたものも有りましやう。併しながら高く、廣く世に對するものゝ注意は其處にある事です。　日本今日の狀態として一般に婦人の醜行には故さらに耳をかたむけ、男子の醜行を咎めるだけ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の評論を二倍にして婦人にかぶせかけやうと思ふものが多いところ、其處へます〱女子の醜行を小さいものも大きく、いや、兎に角說につくッて傳はらせるのは公平にこれを觀察して穩な手段とは言へません。 これ只猛惡な男子、自分は藝者ぐるひして妻君が芝居を見たと責める、不深切な男子たちが齒をあらはして氣味よさゝうに笑ふ材料をつくると同じことです。 まこと女子の醜行を矯めるならば訐いて言ふ事の手段を取るのは二の次です。 まづ諷してから宜しいです。 諷しもせず、突然傍若無人につき落とすのが君子の仕業と言へましやうか。

よし今度の說が實說としろ、それを傳へた各新聞寄書家（多分）の不心切は飽くまでも女性には敵です。 敵から出る流言、其一は信じもされましやうが、同時に其二は信ぜられますまい。 いやしくも訐き出したことなら充分に訐くが男らしいもの、蛇の生ごろしは——よし其說が實にしろ——信を得るものでは有りません。

あゝ〱之につけても日本の女性の朋友は少い事です。 ややもすればいじめる人は有ッて、助ける人が無いのです。 ある人また說を爲しました、「女學校醜聞事件は男書生の中に女學生を見込んで無益にさわいて居るものが數々ある、それから起ッたことであらう」と。 あゝ、今日の男生中章臺にねふり、醼樂にふけるものも多い中、あるひは左樣かとも信ずればまた流言の出た處の目的も付きます。 たゞしわれわれは此事につき信僞を保しません、たゞ聞いた處だけを基にして評して見たのみです。

或は傳へて、女生徒のふりして密賣淫する賤婦が有るといふ人もあります。 これも事實なら流言の出る本とも爲りさうです。

何にしろ、說の眞僞は早晚わかる時が有ります。 女子敎育に關する人がたゞ默ッて心さへすればいゝ事です。 噫。

新小說

このたび新小說は体面をあらためて一種の文學雜誌となり文學上の隨筆などをいくらも載せました。 編輯はやはり從前のとほりで、南翠氏が解讀された古文書などは如何にもめづらしいものです。

日本陶器小史（其四）

萬古燒　萬古は創造者の號です。　通稱を沼浪五左衛門と申し、若燕家宗佐の門人です。　伊勢桑名の豪家であつて茶事を嗜好するのから遂に萬古燒をはじめました。　二代目有節に至つて、ます／＼精に趣きました。　が、韻致は遥か劣つてまゐりました。　それから以來年をかさね、だん／＼諸器を造りましたが、形狀や製作はいよ／＼進みしとはいへ韻致はます／＼退歩してきて、今では元祖萬古の志は全たく桑名を去り、尋常の石器に變じました。　そしてこの陶器は到底海外には望みがありません。　唯内國でしかも中等以下の用に供するばかりです。

東京燒　東京の陶器は元祿のころ白井善次郎なるものが樂燒を製造したのをはじめと致します。　降つて文久三年代福島政兵衛が北豐島郡の三の輪に磁器の窯を造りました、これが磁器のできたはじめです。　而して此窯か稍目的を達しやうとしましたが、不幸にも地主との間に云々が起りまして遂に之を撤去し、磁器製造は全く江戸を去りました。　明治一新後日本陶器が外國に勢力を逞しうしてから、處々の陶製所は丁度午睡を呼び醒まされたとほり、俄かに忙しくなりました。　が、まだ海外の望には適ひません。　これは未た能く其事情に通じないからでしやう。　そこでこれらの事にあかるい瓢池園工會商會戸澤辨枝や内野彌七氏等の工風者が現れました。　けれどこれらは陶器を製るのではありません、皆器地を瀬戸、有田、薩摩などに仰ぎ、そして裝飾するのです。　然しこれを東京陶器の部に入れておくものは、これ等の手をへてはじめて海外に名あるからです。　ひとり高田、今戸、向島にあるのは陶器所といつていゝです。

九谷燒　九谷は加賀の名産であつて、同名を冒す者が數ケ所在りますが江沼郡山代村から出るのが眞の九谷です。このはじめを查べますに、慶安年中大聖寺藩主初代前田氏が江沼郡大日山の麓の九谷村字下村に良質の磁石があるのを開き、藩士後藤才次郎、田村權左衛門の兩人に命じて陶窯を九谷村に築き、陶器を造らせました。　これが九谷燒の鼻祖です。　けれど當時まだ不熟練のため、完全の磁器が出來ませんてした。　そこて藩主は才次郎を肥前唐津に遣り、製陶術を學ばせました。　が、唐津では深く陶法を秘して教へませんゆゑ、才次郎はそこの傭奴となり、三年勞役を取りました。遂に主人の信用を得て、其媒介て妻を迎へ、そして永住の志

を示めし、猶は四年勉強して、陶製の秘訣を悉く會得しました。そこで俄かに妻子を捨て、大聖寺に逃げ歸つて復命しました。其後九谷村に至らうとして吸坂を通るとき、たま〳〵良質の粘土を見出し、これを陶料に用ゐましたが、果して良品を得ました。これからだん〳〵進歩して、當時有名の畫工久隅守景を金澤から聘し、陶畫を描かせました、これで粘土、陶工、畫家がみな備はり、頗ぶる精巧の域に達しました、後世九谷といふのは此時代のものです。然るに如何なるゆゑにか、本處の窯は殆んど廢絶の狀況を顯はしまして百六十余年に過ぎ、全く跡を收めやうとしました時、大聖寺の商人吉田屋八右衛門が深く之を遺憾に思ひ、文化七年六月再び九谷村の陶窯を修復し、支那交趾の式に倣ひ、陶製を始めました。是れが九谷の中興です。同十一年九谷の地が運般に便利ならぬため、陶窯を今の山代村に移しました。之れが九谷陶窯の二代でして、聲價も亦古九谷に亞いでゐます。又吉田屋八右衛門に嗣で起るものは宮本屋理右衛門でした。本處の衰頽を憂ひ、天保六年陶窯を讓り受け、これの改良を計りましたが、丁度其時飯田屋八右衛門なる畫工があつて、九谷固有の赤色に據り、更に一種の工夫を出し、赤彩料に金爛を加へて、一層の美觀を呈はしました。しかのみならず越前敦賀の氣比宮秘藏の方氏墨譜を得てから、大に畫風を改ため、古雅鮮明の陶器を描き出しました。これは赤畫に金爛を施し、光彩目を奪ふやふな装飾のはじめであつて、遂に九谷一定の畫風となりました。

漢字異語同義（其三）　秀溪子

いかる

怒　腹をたて、きつさうのはげしくなる樣子。

怨　うらみいかる事。

恚　ふづくむと訓します。むつとするきみ。うらみをふくみ、じるゝ事。

愇　いかり、すねるきみ。氣にくはぬ心もちがする事。

𢝋　いかる事。腹が立つて、たまらぬきみ。

愾　人につゝかゝるきみ。あたりをもつてゆく事。

憝　懟と同。うらみいかる事。

情　しかりをしのげるきみ。うたがひいかる事。

瞋　懫と同。目をいからし、にらむ事。

瞵　目をいからして、鷹のやうに見る事。

眝　目をみはつて、長く見まはす事。

瞋　聲をいからせ、しかる事。

嚗　にはかに大聲あげてしかること。（又笑ふ聲）。

嚇　口で人を拒せぐと註します。聲をあげてしかる事。

艴　怫と同。氣ふもどり、いかる事。

奰　さかんにいかる事。

いきどほる

憤　心に通ぜぬことが鬱積して、志を起す事。

悒　いきどほりを含んで、口に出さぬ事。

怫　前に出づ。

慍　内心につみつもる怒をふくむきみ。

懣　心の中にたもたれぬきみ。

悶　前と仝。

いふ

曰　口から聲を發して、物をいふ事。

言　口へ出して、其の意をのぶる事。

謂

云　以前の事をときわけるきみ。　うはさのきみ。　尊者に向つて、申しあげる意。

道　言とはゞ同じですが少し異なつてゐます。其譯を

いひきかすきみ。

稱　それを稱揚して言ふこと。　それにかなふやうにいふ事。

いゆ

痊　病が退いて、元氣に復し、常体になつたところ。

愈　癒と同。　さつぱりと平癒した事。

瘳　やみぬけてしまふ事。

已　もはやさつぱりとなつた事。

療　療治を加へてなほす事。

瘥　平復する事。　そべて病のさる事。

いやし

卑　尊の反。　いやしく、下品な事。

庳　屋根のひくきこと。

吝　いやしと訓します。　物ふ手ばなれの惡き事。

賤　貴の反。　位のいやしい事。

固　はたらきのない事。　見識學術の上で申します。

陋　もと体の狹小なる事。

鄙　都の反。　樣子がそばうで、下品る事。

俚　雅の反。　俗にげひたといふ事。

野　朝の反。草などのふひーげつたやうなところ。
下　上の反。下輩なもの。
非　うすくつて、うまつなもの。
猥　様子のいやーしい事。
いそぐ
急　手早く事をする事。すみやかなこと。
いたる
至　往つてその所にかゝる事。
到　其處までもきおよぶ事。
臻　四方よりあつまりよるきみ。其所にいたる事。
跮　ならびいたる事。
躔　しきりにいたる事。ひつしりとそこにつく事。
造　ふーかけるきみ。すゝみいたる事。
達　其處まで行きつく事。
迄　もちつけるきみ。そのところまで至る事。
假　のぼり、いたる事。
活　一處によりあつまるきみ。
詣　まうでると訓します。いたりたつきみ。
訖　其處までゆきいたる氣味。

詎　さること。
括　一處によりあつまるきみ。
投　行つて向ふへ身をつけるきみ。
俶　いたる事。ふつる貌。
格　それに感していたる事。誠のうけになるきみ。
欵　たゝきいたる事。
底　ものゝそこまでゆきまいるきみ。
屆　いたりとゞくこと。きはまる事。
薄　そこまでせまりいたる事。
暨　ゆきつく事。
戾　高き所へいりてみいたる事。
翃　鳥などの飛びいたること。
抵　そこへゆき、いたる事。
放　行くなりにーてれく事。
稽　首が地ふいたる事。
距　そのはしの處までいたる事。
次　深く骨のきはまでいたる事。
傅　それについて、はなれぬやうにーてもく事。

花顔玉手秘事（一）

完全身体白色法ハいらつめ第卅號の前後でくはしく言ひましたから讀者諸嬢も定めて御承知の事でしやう。あの法の成効の確なのハ今更言ふまでも無い事ですが、さて猶こゝに化粧法に於て心得るべき事が有る、それを是から號を重ねて充分お説くつもりです。其第一を手からはじめましやう。

手さきのうるはしいのは如何にも品のいゝもので、素より手の不斷の養ひ方によッてよくも惡くもなります。たとひあらい業をしても養ひ方がよければやはり奇麗で、よし靜にのみして居ても不潔不恰好な手はいくらも有ります。手先きの肉色ハ如何にも紅味を帶びてそしてはのかに靜脈があをく透き、猶爪が貝かなどのやうに紅をいろどッてあるなどの手の美麗のもとで、骨ぐみや恰好はその次です。

骨ぐみや恰好により色々に工夫をかへて手をうるはしく見せられます。　手や指が割りに長い人は手袋をば指のみじかいのを用ゐ、また指のみじかい人は手袋をば指の長く甲のすこし廣目なのを用ゐるがよろしいです。　一般に手袋ハゆるいのよりむしろかたい方が見付きがよく、また白、白茶などの手袋は得て手をわるく大きく見せるものです。

◎にてりあん

毎月一日の發行で、發行處は京橋區八官町十七番地惟一社近頃出色の雜誌です。　◎にてりあん教育を主義としての雜誌で、あゝさア　めい　なッぷ氏などの盡力されるものです。

定價一册七錢

海水浴及び人造海水浴

海水浴の温度は通常華氏の寒暖計で六十度から七十度までの間に限ります。　その前後になると害が有ります。　それ故たとひ自然の海水にすぐ入る時にもこの心得をば忘れずに居なければなりません。

海から遠い處では左の法で人造に海水浴が出來ます。　その法只の鹽四ポンドと清い水十六ガルロンに溶かしたのが最も宜しいので、之を前ぐらゐの温度にあたためて、之に入浴するのです。　之に硫化マグチシアを些し入れゝば猶よろしいです。　たゞし一般お海水浴をした後では更に清水でよく身体をあらふが宜しいです。